駅前中心商店街の変化

小松日の出合同庁舎

小松市は、昭和六十年（一九八五）度に「小松市中心市街地活性化計画調査」、翌六十一年度には「小松駅付近連続立体交差事業予備調査」を実施し、中心市街地の再開発計画と駅周辺土地区画整理事業並びに小松駅付近連続立体交差事業の策定を行った。

これは、「地方拠点都市」として、また小松空港を擁する北陸の「空の玄関」として二十一世紀の南加賀広域圏の中心都市となるべき小松市が、ＪＲ北陸本線により東西に市街地が分断され、交通の阻害や都市機能の低下も指摘されてきたため、北陸新幹線開通前に前述の中心市街地再開発事業と連続立体交差事業、駅東及び駅西土地区画整理事業の三大プロジェクト（駅前三点セット）を平成十六年（二〇〇四）までに完成させ「ふるさとの顔」とすることを目標としたものであった。ただし、この巨大プロジェクトは市単独では不可能で、国（国土交通省）、石川県（土木部）、ＪＲ西日本が協力して取り組んでいくこととなった。実際、連続立体交差事業は石川県、東西土地区画整理事業は小松市が施行主体となり、また三点セットと並行して県と市が共同で「石川

JR小松駅周辺で毎年開催される「どんどんまつり」（平成22年10月撮影）

平成16年(2004)に整備が完了した小松駅周辺(平成16年9月撮影)

県こまつ芸術劇場うらら」の、国土交通省が「小松日の出合同庁舎」の事業主体となり、それぞれ建設を進めた。

これらの事業は、小松市街地を「アーバン・オアシス」(街全体を公園化したパークタウン=公園都市)として再生し、人間的なスケール感、回遊性、界隈性(かいわいせい)のある、歩いて楽しい街とすることが目指された。前述の「うらら」は歌舞伎等が上演できる大ホールを備え賑わい創出の拠点となることが、また「合同庁舎」は地域に開かれた「オアシス空間」として親しまれることが眼目とされた。平成十六年三月には全ての事業が完了し、小松の二十一世紀へ向けての街づくりは大きく前進し、また「どんどんまつり」の商店街開催等で賑わいづくりも一定の評価を得てきたが、その後コマツの工場移転や大和の閉店等で新プランの策定も論議され、「小松うどん」の全国発信や、若者たちの集まりやすい環境づくり等のプランも練られている。

(平野　優)

石川県こまつ芸術劇場うらら(平成22年10月撮影)